

第37回 東伊豆町青少年主張発表大会

発表文集

と き：令和3年11月20日（土）

9時30分～12時00分

ところ：東伊豆町役場1階 大会議室

発表者：町内小中学生の代表、町内在住の高校生
当町に所属する地域おこし協力隊員

主 催：東伊豆町

東伊豆町教育委員会

東伊豆町青少年健全育成会

後 援：東伊豆町PTA連絡協議会

東伊豆町青少年問題協議会

協 力：稲取高等学校ボランティア部

第37回 東伊豆町青少年主張発表大会 目次

1. 開 会 の こ と ば 東伊豆町教育委員 飯田 利喜

2. あ い さ つ 東伊豆町長 太田 長八

3. 発 表

☆小学生の部

- ・いじめを無くすには … 熱 川 小 学 校 6年 野口 はな (P.1)
- ・個性を大事にする社会 … 稲 取 小 学 校 6年 鈴木 凜 (P.2)

☆中学生の部

- ・言 葉 の 責 任 … 熱 川 中 学 校 3年 生田目 朱莉 (P.3)
- ・東伊豆町を災害から守るために … 稲 取 中 学 校 3年 田村 悠華 (P.4)

☆高校生の部

- ・少 子 高 齢 時 代 を 迎 え て … 伊東商業高等学校 1年 竹 内 楓 (P.6)
- ・コ ロ ナ 禍 で 考 え た こ と … 下 田 高 等 学 校 1年 横 山 海 斗 (P.7)
- ・コロナ禍で変わった地域と生活 … 稲 取 高 等 学 校 1年 米澤 ゆず (P.8)

☆地域おこし協力隊の部

- ・独立性ある生き方について … 東伊豆町地域おこし協力隊 高瀬 真由 (P.10)

☆歴代発表者 (P.13～P.20)

4. 講 評 東伊豆町教育長 横山 尋司

5. 賞状及び記念品授与 東伊豆町長 太田 長八

6. 閉 会 の こ と ば 東伊豆町青少年健全育成会
稲取地区連絡協議会会長 鈴木 誠喜

いじめを無くすには

熱川小学校6年 野口 はな

「みんなと仲良くしましょう。」と言われたことがあります。

そこで私はなぜみんなと仲良くしなければいけないのだろう。仲良くしないとどのようなことが起こるのだろうと思い、考えました。考えてみると、仲良くしなければ、いじめにつながってしまうのかなと思いました。

仲良くしないということは、その人をさけたり、悪口を言ったりしてしまうこともあるということです。それが続くと、いじめになってしまいます。また、もっと他のよくないことが起こるかもしれません。

そこで私は、どのようないじめがあるのかを調べてみました。

まず、強要するいじめです。これは、万引きをさせたり、物を買わせたりするいじめです。

次に、言葉のいじめです。これは、悪口を言ったり、強い言葉をつかったりすることです。

他にも、暴力をふるういじめや、無視をするいじめ、物をかくしたり、汚したりするいじめがあるそうです。

平成三十年の小学校と中学校の間で多かったいじめは、冷やかしからいじめ、悪口やおどし文句、軽くぶつかられたりたたかれたり、けられたりといういじめでした。

いじめは、二〇二〇年に六十一万件で六年連続で増えているということも分かりました。

いじめをしてしまったらどうなるのかを調べてみました。人の物をぬすんでしまったら窃盗罪に、なぐる、けるなどをしたら、暴行罪に、けがをさせたら傷害罪に、人の物をこわしたり、かくしたり、落書きをしたりしたら器物破損罪になるなど、いろいろな罰を与えられます。いじめは犯罪ということです。

いじめをなくすためには、どうすればよいか考えました。

まず一つは、人に相談することが大切だと

考えました。思ったことをすぐに相手に言わないで、家族や先生、友達に相談してみたら解決することもあるかもしれません。

また、相手の気持ちを考えることも大切だと思います。例えば、友達に話しかけたら無視されたと感じたとします。そのとき、その友達は違う人と話をしていたかもしれません。また、声が小さくて聞こえなかったのかもしれません。このように、相手の立場に立って考えることも必要だと思います。

友達のことで困ったとき、悩んだときはインターネットに書き込まず、直接相手に伝えることも大切だと思います。インターネットに書き込んでしまうと、世界中の人に見られてしまいます。もしも名前などを書いてしまったら、個人情報も知られてしまいます。インターネットでは伝えたい相手に気持ちを正しく伝える事ができないので、直接相手に伝えることが大切です。

最後に、自分たちにすぐにできるいじめをなくす方法として、あいさつがあります。

私は、一学期に児童会執行部になりました。地域の人、他学年の人、クラスの人とにかくあいさつをしてほしいと思い、「あいさつの花」という企画を考えました。「あいさつの花」とは、クラスで、地域、他学年、クラスの人にあいさつをする人数の目標を決めて、その決めた目標を達成したら、くきだけかかれた模造紙に花びらがはれるという企画です。

私は、この企画を行う前は、コロナ禍ということもあり、他学年と関わることも少なくなったので、どんな人たちがいるのか分からなかったです。

「あいさつの花」が始まって他学年とあいさつをすると、元気に返してくれたり、友達と一緒にあいさつをしてくれたり、あいさつの後に一言付けてくれたりしてくれる子がいました。すると、この子は元気な子だな、とか、この子は毎日あいさつをしているから、クラスで決めた目標を達成できるようにがんばっているな、など、だんだん他学年のことも分かってきました。

クラスの人や他学年の人のことを知ると、偏見がなくなると思います。あいさつをすると相手の性格も分かります。こわいと思っていた人でも、あいさつを交わすとやさしい人なのだと、本当の性格を知ることができます。この企画を通して、たくさんのおたがいのことを知り偏見がなくなり、温かい関係が築けたと思います。

だから、あいさつをすることも、いじめを無くすための一つの方法だと思います。

いじめについて調べたり、考えたりして、さりげない発言もいじめにつながってしまうと分かりました。また、言葉の使い方を意識したり、あいさつをお互いに交わしたりすることで、いじめを防ぐことができると改めて分かりました。だから私はいじめを無くすために考えたことをこれからも気をつけて生活していきたいと思います。

そして、一人一人がいじめに対してもっと真剣に考え、自分たちにできることから実践し、明るいクラス、学校、地域社会になってほしいと思います。



個性を大事にする社会

稲取小学校6年 鈴木 凜

「男子なんだから、重い物を持ってよ。」
普段、私が何気なく言うてしまうこの言葉に、深い意味はありません。それなのに、

「女の子でしょ。もう少し上品にきなさい。」

という言葉が誰かから言われると、性別だけで自分を判断された気がして、とてもいやな気持ちになります。

アンケートなどで、性別について答える欄があれば、私は迷わず「女」に丸を付けます。学校では、男子と女子で協定服に違いはあるし、健康診断も男女別々に行います。だから、私が女子だということに違和感はありません。

しかし、この前テレビ番組で、「男」・「女」という書き方はやめてほしいという人を観ました。それを聞いて、私はとてもおどろきました。テレビに出ていたその人は、

「女として生まれてきたけれど、心は男なので、ずっと悩んできた。性別が二つの選択肢しかないのは、おかしい。『男』と『女』の欄は、無くしてほしい。」

と、泣きながら話していました。その姿を見て、私は「男だから」、「女だから」と決めつけるのは、改めてよくないと思いました。ある調査によると、日本の十一人に一人がLGBTであるということでした。これは、左利きの人数の割合とほぼ同じです。このことから、私のクラスの中にも、男子でも女子でもない価値観をもった人が一人いてもおかしくないということが分かりました。

また、性別に関係して、「男女平等」という言葉をよく耳にします。昔の日本は、「男は仕事」・「女は家事」という社会だったと言われています。現在の日本は、そのときと比べると変わってきています。それでも、政治家に男性が多いことや、幼稚園には女性の先生が多いなど、職業によって性別の偏りがあります。体の大きさなどで男女の区別があるのは、仕方のないことかもしれません。しかし、どちらが職業上偉いとか決めつけるのは、あってはならないことだと思います。

私が通う学校でも、同じことが言えると思います。学校では、入学式や卒業式の準備で、飾りつけは女子がやるような雰囲気があります。また、重いピアノを運ぶ作業には、いつも当たり前のように男子ばかりが手伝いに行きます。

私は、男女関係なくみんなで力を合わせ、行動することが大切だと思います。それは、学校でも社会でも同じだと考えます。例えば、

男女関係なくみんなが楽しめるクラス遊びを考えたり、委員会の人数も男女平等にしたりした方がいいと思います。縦割り遊びなど、他の学年の仲間と関わる活動のときも、

「この子は男子だから。」

「女の子なら…。」

と差別をせずに、一人の人間として平等に接したいです。このような小さいことから、お互いの良さを認めて、理解し合う本当の意味での「男女平等」をめざしていきたいと考えます。

そして、相手を認め、受け入れることです。お互いを思いやる気持ちをもてば、温かい雰囲気になるからです。自分が思い描いている「基準」で人を正しいとか変だとか決めるのは間違っていると思います。

また、私は見た目で人を判断しないようにすることを心掛けようと思いました。性別で苦しんでいる多くの人が、もっと自分の思いを伝えやすい社会になればいいと思うからです。

私は、違うことにその人らしい「良さ」があると思います。だから、差別をしてはいけないと思います。「男」とか「女」とかいう前に、私たちは、みんな同じ一人の人間です。一人の個性を大切にしようという考えをもつ人が集まれば、人と人との温かいつながりが生まれ、笑顔あふれる明るい社会になります。相手のことも、自分のことも大事にできれば、犯罪や非行が無くなり、お互いが気持ちよく生活することができる世の中になるのではないのでしょうか。

小学生の私にできることは、限られているかもしれませんが、まずは、周りの人の価値観を大切にして、誰に対しても同じように接していきたいです。



言葉の責任

熱川中学校3年 生田目 朱莉

皆さんはどのようにSNSを利用していますか。SNSで、良くないことをしてしまったと、後悔をするようなことがありますか。今の時代に生活する多くの人は、SNSを使用していると思います。私も、その内の一人です。

夏休みも半ばを過ぎた頃、私は暇つぶしのつもりで動画投稿サイトを見ていました。その内の一つには、動画を投稿した人とは違う別の人の顔がメインで写っていました。その人に許可を取って載せているかは言及されていませんでした。その時私は（もし、この動画が、許可を取らずに投稿されていたとしたら良くないよね。しかも、悪く言われているし）と思いました。その時の私は、そう思うことしか出来ませんでした。

SNS上では、事実を知る人がいない限り事実をねじ曲げて投稿することが可能です。でも、その言葉を投稿する責任について考えた事はあるのでしょうか。

なぜ簡単にこういった動画をあげてしまうのでしょうか。それは、SNSを「あまく」見ているからだと思います。以前、女子プロレスラーだった方が、SNSによる誹謗中傷が原因で自ら命を絶つ事件がありました。この事件以外にも、SNS上では、誰かのことを誹謗中傷する書き込みが日常的に行われています。そしてそれが、普通のことになりつつあるような気がします。私は誰かに対する誹謗中傷の言葉を目にしたことがありましたが、その時は私自身に対しての言葉ではないので、特に何も感じませんでした。いつの間にか、私の中でこれらのことが普通になってしまっていたのです。しかし、この事件が大きく取り上げられたことにより、私を含め、意識が大きく変わった人も少なくなかったと思います。「みんなが言っているから大丈夫。匿名だから大丈夫。ちょっといいじただけだからたいしたことない。」と、浅はかな考えか

ら起こったことだと思います。みんながやっているからやっているとすることはありせんし、自分で書き込んだからには責任を負わなければなりません。消せば大丈夫なんてことは有り得無いことです。だから、匿名ということを利用し、誹謗中傷をすることはすべきことではありません。ちょっとしたふざけ心、思慮に欠けた心で書き込んだ文章の捉え方は、悪い方向へ行ってしまうことでしょう。無限に広がるかも知れない悪意のある誤解を招くことになるのです。

そもそも、SNSで悪口を言うことが良くないのです。誰かまたは何かに不満があつてその不満を他の人と共有したかったり、発散させたくて書き込みたくなったりする気持ちは私にもわかります。しかし、SNSに書き込みをすると、更に事態をややこしくしたり、悪化させたりすることになります。二月に起きた旭川のいじめ事件でも、SNSが使用されました。被害者が知られたくない写真を加害者は勝手に拡散させ、どんどん追い詰めていきました。私が使用しているSNS上でこのような事件が実際に起きているので、全く他人事とは思えません。感情は、人間誰しもあります。だからこそ、感情の発信の仕方を全体で本気で考えるべきだと思うのです。

近年SNS上でのいじめや事件が増加しているのは、SNSの使用年齢が若くなっている事も起因していると思います。善悪の判断力が弱い子ども達でも使用できる環境が出来てしまっていることは、時代の流れで仕方の無いことだと思いますが、子どもが使う場合は周りの大人が注意を払い、正しい使い方が出来るかどうかを見届けてあげける必要があると思います。加えて、大人が大人足るべき姿、すなわち、大人自身が子ども達の手本となれるよう行動することが大切だと思います。

SNSは、誰でも気軽に利用できる時代です。悪い事に使えば、人の命を奪ってしまうような恐ろしい凶器にもなります。逆に、多くの人の善意を集め、命を支えたり救ったりすることの出来る大きな力にもなります。ど

うSNSというものを活用していくか、利用する人間に任されている今、私は、細心の注意を払い、そこに使う言葉の重みを理解し、間違えの無い有益な使い方をしていきたいと思っています。



東伊豆町を災害から守るために 稲取中学校3年 田村 悠華

私は、私の住む東伊豆町の自然災害について考えました。考えるきっかけとなったのは、七月三日に起きた熱海市の土石流災害が私たちにとって身近な存在かもしれないと感じたからです。

まず、東伊豆町は災害が起きやすい土地なのか気になり調べることにしました。これまでの災害履歴を見てみると、全て一九〇〇年代のもので、私自身大きな被災経験がないため災害は比較的起こりにくい地域なのかかもしれません。しかし、近年では、山地において局所的な集中豪雨により、山腹崩壊や土石流などの山地災害が発生する危険性が高くなっているそうなので、傾斜地の多い東伊豆町は安心できません。

そこで、自然災害が起こる原因を調べ、私でもできる対策方法はあるのか考えました。調べてみると、「災害」には「環境問題」が大きく関わっているということが分かりました。まず、「環境問題」として捉えられているものが原因となって「災害」に行き着くということがあります。例えば、山地に関係するもので言えば、森林の劣化があげられます。樹木

の細根は地盤の侵食や崩壊を防ぐ働きをしています。しかし、現在の日本の森林は天然林が減少し、人工林の比率が拡大している状況です。人工林も定期的に手入れされていれば本来の根の働きをしますが、少子高齢化が進んでいる今、人工林の管理が十分にされていないそうです。そんな手入れされていない多くの人工林が放置されると木と木が互いの成長を阻害し、根が十分に張れないことで土砂災害へとつながります。これが、近年、山地で災害が発生する危険性が高くなっている原因の一つだと思います。このように、原因となっている「環境問題」を事前に抑えていくという対策法が効果的だと考えます。

そこで、まず森林の劣化の原因である人工林の管理を十分に行う対策法はないか探してみると、「皮むき間伐」という方法を見つけました。皮むき間伐とは、通常の間伐とは異なり、樹木の皮を剥がすことで、木が水を吸い上げることができなくなり、木が生えたまま枯れていくという間伐方法です。その後、枯れた木を伐採し、密集した森林に日光が届くようになると、落葉樹が増え、山の土がスポンジのような役割を果たして土砂災害を防ぐことができます。皮むき間伐は木が立ったままの状態で作業ができるので、専門の方だけでなく、女性や子どもでもできるそうです。この活動は日本全国で行われており、賀茂地区では、南伊豆がこの活動に取り組んでいます。私も、皮むき間伐に参加し、この活動をより広げていきたいです。

また、人工林の管理不足の他に、鹿や熊による剥皮被害も土砂災害の原因となっています。どれだけ人工林を手入れしていても、野生鳥獣の食害を防がないと、強い森林をつくっていくことはできないという資料もあります。食害に対する効果的な対策は少ないようですが、テープ巻きという、皮むき間伐と同じように、女性や子どもでもできそうな方法があります。このようにできそうなことから進んで取り組み、森林を守っていく一員になりたいです。

しかし、私一人だけではこれらの方法を実行に移すのには時間がかかります。一人ひとりがすぐに行動に移せて、少し意識すれば変わることから取り組んでいく必要があると考えます。例えば、身近なことで言うと地球温暖化の対策があります。土砂災害を促してしまう雨も、気温の変動から大雨の頻度が徐々に増えている傾向があり、森林劣化の原因にも地球温暖化が関わっています。

地球温暖化と聞くと世界規模の問題だと捉え、一人では何も変わらないと考えがちです。しかし、誰も居ない部屋は電気を消す、エアコンの設定温度は二十八度にする、買い物をするときはエコバックを使うなど、今の生活を少し見直すだけで地球温暖化対策につながります。地球温暖化の対策は、「一人ひとりが意識する」ということが重要だと思います。その一人として私は、小さなことからコツコツと行動していきたいです。そして、周りにいる家族や、友人に自分の取り組みを広め、一緒に東伊豆町の環境を守っていきたいです。

七月三日に起きた熱海市の災害から、私は災害に巻き込まれないためには、災害を想定することが大切だと改めて感じました。今回の土石流の原因は盛り土となっているそうですが、土砂災害の原因は地震や森林の劣化、集中豪雨がほとんどです。土砂災害の前兆に気づき、「何か起きるかもしれない」と早めに避難準備をすることが大切です。

災害は起きたら止めることはできません。だからこそ、事前準備として、災害を想定し、普段から枕元に防災バックを置いたり、家族や近所の人たちと防災マップなどの確認をして情報の共有をしたりすることが必要になってきます。これらのことを、実際に災害が起きていないから「まだいいかな」「いつかやろう」などと、後回しにして、行動に移さない人の方が多いと思います。しかし、誰か一人でも動けば周りの人もそれに触発されると思います。その「一人」として、私が率先して行動していきたいです。

そして、一人ひとりの取り組みから地球を

守り、さらに、私の住んでいる東伊豆町も守っていけるようにしたいです。少しでも、災害から東伊豆町の景観と地域の方々を守り、この町のよさを保っていきたいです。



少子高齢時代を迎えて

伊東商業高等学校1年 竹内 楓

現在、東伊豆町の人口は一万二千人前後ですが、二〇〇〇年頃までは約一万六千人でした。この間、約四千人の人口が減少したことになります。

なぜこれほどまで減少してしまったのでしょうか。私は、県の「伊豆半島道路ネットワーク会議」が作成した資料「伊豆半島の現状と課題」（平成二八年）を基に、その背景を考えました。

資料によると、この東伊豆町を含む伊豆半島南部の人口の伸び率は、全国及び県平均と比べて大きな減少傾向にある一方、高齢者割合は全国及び県平均よりも増加傾向にあるそうです。

特に伊豆半島南部には、平成五二年つまり令和二二年に、人口が一万人を割る消滅可能性都市が四町存在すると推定され、東伊豆町も人口が約七千人まで減少してその一つになるとされています。この先、私たちの町はどうなってしまうのか、これはかなり気がかりな予測です。

では、人口減少の要因にはどのようなことがあるのでしょうか。それについて、いくつか述べたいと思います。

まず一つ目は、医療事情です。伊豆半島南

部の死亡率は、全国平均を大きく上回り、心疾患・脳血管疾患では約二倍にも上るほどです。

私は、伊豆半島の医療機関は優れていると思いますが、それにもかかわらず死亡率が高いのは、特に伊豆半島南部には第三次救急医療施設がなく、救急搬送に時間がかかりすぎることも大きな原因だと思います。

ドクターヘリは、視界が開けていることが前提なので、夜間や悪天候、濃霧の場合は飛ばず、「救急車が天城峠を越えられるかどうかが生死を分ける」という話をよく聞きます。

そこで、一番望ましいのは、伊豆半島南部に第三次救急医療施設ができることです。これが実現すれば、死亡率が下がり、地域の人たちは安心を得られ、人口流出にも歯止めがかかるのではないかと思います。

しかし、これには莫大な建設費や維持費がかかるので、それほど容易なことではありません。そこで、現在建設が進む伊豆縦貫道の完成を待ち、地域の医療機関と第三次救急医療施設との連携が強化されるよう、まずは願います。

二つ目は、自然災害の影響についてです。

自然災害とは、地震や津波、豪雨といった自然がもたらす災害のことです。

近年は、気候変動により、その発生が頻繁になり、非常に激しくなりました。まだ記憶に新しい熱海市伊豆山の土石流災害も、記録的な大雨がきっかけでした。

また、伊豆半島では以前から、南海トラフ巨大地震等の発生が高確率で予想されており、最大震度は6強とされています。

これら自然災害に対する不安は、決して小さなものではありません。そこで、いかに「想定外」の事態を減らしていくか、防災面の備えも、地域の人たちの安心には欠かせない要素です。

三つ目は、交通安全についてです。

伊豆半島は、地形上、道幅が狭い箇所が多いので、車のすれ違い時に正面衝突などの死傷事故が多発しているそうです。死傷事故全

体に占める正面衝突の割合と、同じく死傷事故全体に占めるすれ違い時の割合が、ともに県平均を上回っています。

改善策としては、道幅の拡張が一番ですが、地形や費用面もあるので、カーブミラーの設置や、夜間におけるライト点灯の奨励、観光客への案内の徹底など、できる対策から一つずつ進めることが大切です。

夜間は帰宅を急ぐ人や犬の散歩をする人などが事故に巻き込まれやすいし、初めてこの土地を訪れる観光客は道が分からず、事故を起こしやすいと思います。

交通安全対策の充実は、地域の人たちに安心をもたらすとともに、この土地に対する観光客の評価も高め、人の来訪を促す大切な要素です。

以上、東伊豆町の人口減少の要因を、医療事情、自然災害の影響、交通安全という三つの面から考えてみましたが、もちろん他にも、就職面や買い物事情、教育面、文化面など、多くの要因が考えられると思います。

自然に恵まれたこの地域で、一人ひとりが笑顔で暮らすためには、行き届いた行政と、お年寄りや困っている方々に進んで手を差し伸べるような共同体意識を、私たちみんなが持つことです。

私は、高校生として日々様々なことを学んでいます。それらを糧に、この少子高齢社会をじっくりと生きていきたいと思います。互いに知恵を出し合い、力を集め、誰もが暮らしたくなる町をみんなで築いていきましょう



コロナ禍で考えたこと

下田高等学校1年 横山 海斗

現在、世の中は新型コロナウイルスの影響で様々な問題が起こっています。その中で私が考えたこと、思ったことを発表します。

一つ目は、新型コロナウイルスの影響で制限されてしまった行動範囲についてです。私は、下田高校に入学した今が一番楽しいと感じています。中学生の頃にはできなかった帰り道の途中でお店に立ち寄ったりすることが出来ます。また、学校が終わった放課後に友人たちと一緒にどこかに遊びに行ったりします。ですがその際、ほとんどの飲食店で営業時間が短縮されていたり営業自粛されたりしていてなかなか行けません。営業しているお店があったとしても、行くこと自体が怖くて行けなかったりもしました。休日でも友人たちとカラオケに行ったり遠出をしたりしたいのですが、緊急事態宣言が発令されているのですべてのカラオケ店が閉まっていたり行けなかったり、繁華街にはたくさんの新型コロナウイルス感染者が出ているので怖くて行けません。このように高校生なのに外出ができず、自宅に大人数で集まることもなかなかできません。ですが、自宅にいてもインターネットを利用して友人たちとゲームができるので行動範囲が制限されていても十分に楽しむことができます。それでも早く友人たちと遠出をしたり大人数で集まって遊んだりできるようになってほしいです。

二つ目は、もし自分が新型コロナウイルスに感染してしまった場合についてです。学校は絶対に行かなければならないので電車を利用して高校に通学します。その中で、いくら感染対策をしても新型コロナウイルスに感染してしまう可能性があります。そして、もしそこで自分が新型コロナウイルスに感染してしまったらと思うととても怖いです。まだ僕は高校生なので車の運転などができず病院に行くには親に連れて行ってもらわなければなりません。さらにいくら軽症であったとしても

自分自身がつらいだろうし、誰かに看病してもらう必要があります。自分が新型コロナウイルスに感染すると必ず誰かに迷惑が掛かってしまいます。そして、自分自身も発熱、咳、呼吸困難など様々な症状が出たりしてとても辛い思いををすると思います。そのことを想像するだけでとても怖いと思いました。

三つ目は、自分が新型コロナウイルスに感染して身近な人にうつしてしまった場合についてです。私は現在、今年で七十三歳になる祖父と一緒に暮らしています。もし、祖父にうつしてしまったら最悪の場合亡くなってしまうこともあります。自分の責任で祖父が亡くなってしまうことを考えると、とても怖く悲しいです。また、祖父だけでなく両親や仲の良い友人などにうつしてしまうケースも考えられます。両親にうつしてしまったら、当然仕事にも出られないし家事もできなくなってしまいます。そして友人にうつしてしまった場合も、その友人の家族、友人の友人等どんどん感染の輪が広がっていったら何十人、何百人と感染者が増えていく可能性があります。その原因が自分になってしまうことは耐えられないと思います。だからこそ、感染症対策を徹底し自分自身が新型コロナウイルスに感染しないことが一番大切だと考えました。

四つ目は、新型コロナウイルスの影響で変わってしまった経済環境についてです。最初の頃は、多くの人がマスクを買い占めてしまったため、マスクが値上がりしたり、入荷が追いつかず品切れ状態になったりしました。その他にも、飲食店に来るお客さんの数が一気に減少したり、閉店してしまうお店がたくさんありました。インターネットで調べてみると、新型コロナウイルスが猛威を振るうようになってから今年の九月までの間で倒産してしまった会社は二千件以上もあるということでした。このように新型コロナウイルスは経済環境に大きなマイナスの影響を与えています。しかし、そのような中であってもインターネットオークションやインターネットショッピングは以前よりも需要が高まり、

新型コロナウイルスに対応するために様々な技術が急速に発達したこと等、生活水準を落とさない工夫が多く見られたため、プラスの面もあったように感じました。新型コロナウイルスと経済の関係についていろいろな変化・発見が知れて良かったです。

今回、新型コロナウイルスについて改めて考えることで、悪い方向にも良い方向にも影響を与えていると感じました。行動範囲が制限されたり大勢の死者が出てしまったりと、マイナスな面がたくさんありますが、自宅で過ごす時間が増えたことで家族と過ごす時間も以前よりも大幅に増えました。新型コロナウイルスの怖さを知ることによって家族の大切さを改めて感じることもできたプラスの面もありました。新型コロナウイルスが一日でも早く終息できるように、外出を控え、マスクをし、手洗い・うがい・消毒などの対策を自分自身が徹底し、周りにも呼びかけていきたいと考えています。



コロナ禍で変わった地域と生活 稲取高等学校1年 米澤 ゆず

私が住んでいる稲取は、お祭りや行事など地域の方々との交流が多く温かい町です。学校に行く時には、「おはよう！頑張ってるね。」帰る時には「おかえりなさい！」、雨が降りそうな時には「今日は、雨が降りそうだけど傘持った？」と声をかけてくれます。お互いに名前を知っている訳でもないのに、優しく声

をかけてくれます。幼稚園から小学生までが集まった子供会では、海や神社の清掃、地区のお祭り、豆まきなど様々なイベントが行われます。清掃を通じて地域の方々と話したり、稲取の歴史に触れたりすることができます。しかし、一昨年の2019年から新型コロナウイルスが流行し始めました。今まであったイベントなどの規模が縮小されたり、中止されたりして地域の方々と交流する時間が大幅に少なくなりました。観光客も徐々に少なくなり、賑やかさが無くなっていきました。朝の登下校の時間にも、地域の方々に会うことがほとんど無くなってしまいました。私は、新型コロナウイルスがニュースに出始めたころ、日本では感染者が出ていないこともあり、あまり関心がありませんでした。しかし、徐々に世界各国に広がっていき、日本でも感染者が出始めたことで、ようやく危機感を感じるようになりました。とはいっても、修学旅行がなくなったら嫌だなあというような、自分自身に直接関わるようなもので、まさかこれがその後数年続き、当たり前だと思っていた日常が一変してしまうようなものだとは、夢にも思っていませんでした。

新型コロナウイルスは私たちの日常に大きな変化をもたらしました。今までも手洗いうがい、消毒はしていましたが、今まで以上に念入りに行う必要が出てきました。また、机の距離を離す、寒い日も定期的に換気を行う、友達同士でも適度な距離を保つなどの三密を避ける行動を心掛けなければいけないことになりました。何より大きく変わった事といえば、マスクを常に着けて生活しなければならないということです。今までにも、インフルエンザが流行する時期になるとマスクを着けることはありましたが、息苦しくなったときや暑くなったときは外してもそこまで注意をされることはありませんでした。しかし、新型コロナウイルスが流行し始めてからは、マスクの着用が義務付けられていると言ってもいいほど日常に溶けこんでいます。マスク越しのコミュニケーションは、無い状態のコミュニ

ケーションとほとんど変わらないといっても、友達や地域の人々の笑顔を直接見ることができないという点で、どこかさみしい気持ちになることがあります。私たちがどれだけ手洗いうがい、消毒やマスクの着用、三密を避けること心がけても感染者は増え、緊急事態宣言が出されました。学校も1ヶ月近い休校にならざるをえなくなりました。たった1、2ヶ月の休校とはいえ、同級生たちと過ごす大切な時間が失われてしまったことは、仕方のないことですが、同じくさみしさを感じた出来事でした。

人との交流が減り、今までの活気のある温かい町とは言えなくなっていました。しかし最近では、規模は今まで以上に縮小されたものの新型コロナウイルスの影響で中止になっていたイベントが少しずつ開催されるようになりました。開催されるといっても校内行事やちょっとした町のイベントなどの小さな行事ですが、新型コロナウイルス感染防止対策がより一層日常化し、かつての日常生活に戻しても良いと、少しずつ認められだしたからだと思います。こうした校内や町内のイベントで少しずつ人と交流する場が増えるとともに、観光客等も徐々に戻ってきて、町に活気が戻ってきていることを実感します。新型コロナウイルスにいつ終止符が打たれるか分からない中、過ごして行くのは大変な事だと思います。これからもイベントだけではなく、軽い挨拶などのちょっとした交流も増えて行くことが出来れば、この稲取の温かさがより広がり、新型コロナウイルス感染拡大前よりもいい町になって行くと思います。多くのイベントが無くなって来て、どれだけそのイベントが楽しかったか、いい行事だったかが分かりました。このコロナ禍で経験したことを糧にし、次は自分たちも町の住民として、地域の方々と観光に来た方々を喜ばせる手伝いをしていきたいと思います。

まだまだ新型コロナウイルス終息の余地は見え、いつ感染拡大が起きるか分からない状況では、一人一人の行動が今後の生活に関係し

できます。当たり前のことですが、感染拡大防止として三密を避けたりマスクを着用したりすることが、今私たちに出来る大切なことだと思っています。これ以上楽しかったイベントや地域の人との交流を減らないよう、今、自分たちが少し頑張って予防することで、コロナ禍となる前のマスクをつけないことが日常だったときや、地域のイベントや学校行事が縮小されずに行われて来たときのように過ごすことが出来ると思います。実際に、修学旅行の実施がぎりぎりまで検討されたことや、校内行事が縮小されて行われたことなど、大変な思いをしてきました。私たちも学生ながら、校内行事の縮小や中止などの大変なことを経験した分、大人の方々はそれ以上大変なのだろうと、様々な場面で肌で感じています。それを踏まえて、高校生である私たちはこの町をより豊かにするために、これまでの感染拡大予防を継続し、私たちでもできる活性化の手助けに協力して取り組んでいきたいと思っています。



独立性ある生き方について

東伊豆町地域おこし協力隊 高瀬 真由

ここ数年、YouTuber やインスタグラマー・インフルエンサー等、一つの企業に所属せずとも自らの強みを仕事とし収入を得る形が定着している。最も若者の「起業」においては、大都市である東京はもちろん、いわゆる田舎と呼ばれる人口の少ない地域でも注目されて

いるビジネススタイルの一つである。

まさに”独立性ある生き方”がフォーカスされる現代において、「好きなことを仕事にしたい」という若者は多く、その実現性も高い。さらに、従来の日本における起業やフリーランスと比べて、現代ではハードルが低く挑戦しやすいことも見受けられる。そして、かくいう私もその恩恵を受けた一人だ。

しかし、上記に述べた YouTuber 等の活動が世間で目立っているからこそ、実現生の高さや個の尊重が連想されているのであり、実際には「やりたいことがない」と言いつつ一歩が踏み出せない若者や、何から始めて良いものか分からないまま諦めてしまう若者が大多数を占めるのではないだろうか。

「やりたいことがない」ことについて、何かを見つけたほうが良いというような意見は持ち合わせていないが、転機も閃きもチャンスも、突然空から降ってくることはないということだけ、今を生きる若者に伝えたい。

かつて私は、”NHK の歌のお姉さん”になることが夢であった。大学4年生の時にオーディションの切符を手にするも、最終試験で落選。幼い頃から”NHK の歌のお姉さん”だけを目指し鍛錬していた私にとって、まさに挫折を味わう出来事であり、将来の選択肢を失った。しかし、現在私は歌のお姉さんとして仕事をし、出張コンサート事業にはスポンサーが付き、プロの音楽家として活動をしている。ここで話したいのは、キャリアに関するだけでなく、挫折から夢を叶えた方法、転機、後世に伝えたい想いである。

小学校から高校までを音大附属で過ごし、同音大に入学をした私は、自他ともに認める世間知らずであった。音楽家を目指すのだから音楽をとにかく勉強しなければ！と息を巻いていた大学1年生の頃、初めてのアルバイトを経験した初日に「音楽を学ぶだけではプロにはなれない」と気づき、学業に支障のない範囲で様々なアルバイトに挑戦した。お惣菜屋さん・お菓子屋さん・電気屋さん・事務・キャンペーンガール。接客業はコミュニケ

ーション能力を高め、後に営業に役立った。責任あるポジションを任された際には、仕入れ値等の仕組みを知ることができ、芸術を商品化する際の金銭面において勉強することができた。

大学を卒業後、夢破れながらも音楽から離れる決意は出来ず、まずは1年間だけ音楽の道を探してみようと考え様々な音楽業の形を模索した。病院や老人ホームにてボランティアの演奏活動を行う中で、改めて生演奏の力に感銘を受けた。さらに「これは音楽の出張だ。音楽の出張は、地域や年齢、障害を超え、人が在り続ける限りどこまででも届けられる」と閃いたのである。TVを通せば、より沢山の人々に音楽を届けられることに違いはない。だがしかし、決して安くはないチケットを購入し、楽ではない移動を要するコンサートに行き、生演奏を体験できる家庭はどのくらいあるのだろうか？日常生活の中で、家庭環境も関係なく音楽に触れることが出来る仕組みを作りたいと考え、生演奏の出張コンサートにたどり着いたのである。そこで私は、保育園や幼稚園に営業に回り、生演奏をさせてほしいと頼み込み、コンサートを実施した。結果、その活動を見込んだある演奏派遣団体の代表が、「たかせまゆ 歌のお姉さん出張コンサート」という事業を立ち上げ、現在は年に約100本の出張コンサートを行なっている。

ついに、プロの音楽家としての独立を叶えた。そしてその独立は、私の第二の人生へと結ばれていき、かつて憧れていた田舎暮らしを求めて東京から東伊豆へ移住。音楽業と並行し、地域おこし協力隊として地域活性化事業にも励んでいる。

協力隊として行っていることは二つ。歌のお姉さんであるスキルを活かし、地元の子どもたち向けのイベント企画・運営、そして元観光客の視点をを用いた観光促進である。

この町で働き3年目。私にとって地方で働くということは、非常に幸福度の高いライフワークである。その理由として、私は東京で働いている頃空を見ることはほとんどなかつ

た。ビルに囲まれた生活から、空に包まれる生活へと変わり、人とのコミュニケーションも一段と増え、どんなに多忙な日々にも人の温かさに触れることができ、この東伊豆は町の至るところにリフレッシュが存在している。

中でも何より感銘を受け、私の暮らしを支えてくれたのは、町の皆さんの優しさである。

2020年、新型コロナウイルスにより観光客の足がピタリと止んだ時、女性の社会貢献とキャリアを評価するビューティージャパンという大会に、東伊豆町のPRのために出場しグランプリを受賞した。グランプリという結果を受け特に評価された点は、紛れもなく地域の方の愛である。大会で制作されたカタログには13もの地元企業の支援によって、東伊豆のPRページを差し込むことが出来た。さらに大会前には壮行会、大会後には祝勝会と、約50名の町民が応援に駆けつけてくれたのである。当時は、なぜこんなにも応援してもらえるのか自分でも不思議に思い、これまでの自分を振り返ってみた。

移住して初めの頃、とにかく町のことを知ろう、町の方と繋がろうと思い、ほとんどのイベントに足を運び、自身がどのような活動をしていきたいかを直接伝えてきた。真摯に聞いてくれる方もいれば、腑に落ちない顔を露わにする方もいた。しかし、私は足を運び「伝えて行動すること」をやめなかった。そうして手に入れたものが、地域の方の愛だった。

私がこのライフキャリアを通し学んだこと。一つ目は、いかなる職を目指す場合も、まずは社会の仕組みを知る必要があるということだ。音楽家を目指すからといって、音楽だけを学べば良いということではない。自身の場合は、学生時代のキャリアがなければ音楽家としての独立はまずあり得なかったであろう。

二つ目は、先にも述べた「足を運び、伝えて、行動すること」の大切さである。SNSをはじめ様々なコミュニケーションツールが発達し、文字でのやり取りがメジャーとなっている現代。しかし、「人は直接会ってみなけれ

ばわからない生き物である」ことを、覚えておいて欲しい。したがって、自分がどんな人間かということも、テキストでは伝えられず信頼に足らないのだ。

企業に所属をする場合も個人で仕事をする場合も、まずは誰よりも先に動きスタートダッシュを決め、人の信頼を得ていくことに、成功のヒントが隠されている。

終わりに、独立性ある生き方とは、自らの強みを見出し、その強みと数あるコンテンツを掛け合わせることによって生まれる、唯一無二の人生であると考えている。

「やりたいこと」の具現化、叶えるための手段をより多くの若者に伝え、夢を再度追いかけて直したこの人生が誰かの役に立てるよう、これを以て主張とする。



歴代発表者（青少年主張発表大会）

回数		第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回
学校名		昭和60年度	昭和61年度	昭和62年度	昭和63年度	平成元年度
小学生	大川小学校 5 年	稲葉 賢史	後藤 麻衣子	鎮田 泰代	稲葉 恭子	内藤 晴之
	大川小学校 6 年	飯田 瑞穂子	稲葉 美穂子	稲葉 隆行	稲葉 早千江	飯田 めぐみ
	熱川小学校 5 年	小林 千枝	鈴木 理史	川上 竜司	木村 昌弘	藤井 愛
	熱川小学校 6 年	井原 みゆき	森田 綾	島田 浩充	濱野 剛稔	横山 あかね
	稲取小学校 5 年	村木 町子	山田 亜矢子	奈良 有希子	石井 夏菜	雲野 多恵
	稲取小学校 6 年	加藤 郁美	鈴木 美恵子	渡辺 宏	村木 美輝	内藤 美奈子
中学生	熱川中学校 1 年	嶋田 千穂	飯田 瑞穂子	加藤 久美子	加藤 友美	小林 浩一
	熱川中学校 2 年	土屋 いづみ	兼子 まや	飯田 瑞穂子	稲葉 るみ子	加藤 友美
	熱川中学校 3 年	前田 慶子	及川 智恵	稲葉 真紀	児島 涼子	稲葉 美穂子
	稲取中学校 1 年	鈴木 有美子	福岡 慈子	金指 直子	田原 竜也	太田 雅也
	稲取中学校 2 年	山田 幸二	滝 裕子	福岡 慈子	渡辺 奈穂子	田山 麻理絵
	稲取中学校 3 年	堀川 泰代	滝 悦子	平田 洋子	石原 尚子	古屋 桃子
高校生	稲 取 高 等 学 校	松山 美加	田原 俊介	和田 めぐみ	鈴木 活生	庄司 好男
					土屋 時乃	遠藤 智美
	下田南高等学校					鳥沢 たまき
	伊 東 城 ヱ 崎 高 等 学 校				大内 佳人	雄谷 隆夫
						三浦 周一郎
	下田北高等学校			鈴木 参日	辻 由美子	加藤 正剛
	下田南(定時制)					
	伊 東 商 業 高 等 学 校					
	伊 東 高 等 学 校					

回数		第 6 回	第 7 回	第 8 回	第 9 回	第 10 回
学校名		平成 2 年度	平成 3 年度	平成 4 年度	平成 5 年度	平成 6 年度
小学生	大川小学校 5 年	木村 直樹	稲葉 世里子	稲葉 健太	飯田 多賀乃	横山 美和
	大川小学校 6 年	飯田 剛弘	木村 和加子	山下 優子	飯田 洋一	片山 房子
	熱川小学校 5 年	山本 稚奈	木村 奈津子	小林 真瑛	田神 敬祐	坂田 菜穂子
	熱川小学校 6 年	木村 明人	戸田 景子	木村 浩子	高羽 さやか	太田 恵子
	稲取小学校 5 年	伊東 久恵	鈴木 智和	山田 美保子	鈴木 精一郎	内山 亜紀子
	稲取小学校 6 年	垂井 幸	桑原 加奈子	横山 真理	太田 博之	小池 正治
中学生	熱川中学校 1 年	不二山 千晴	溝尾 祐	不二山 仁美	野澤 留実	鈴木 美菜
	熱川中学校 2 年	土屋 はるか	金指 亮太	豊島 真美	鈴木 佑理	野澤 留実
	熱川中学校 3 年	秋永 美絵	鎮田 泰代	飯田 留美	島田 深志	山本 稚奈
	稲取中学校 1 年	内藤 夕子	小知和 寛子	篠田 知子	鈴木 未奈	古屋 彩花
	稲取中学校 2 年	鈴木 照子	斎藤 立枝	小知和 寛子	花田 知子	遠藤 裕美
	稲取中学校 3 年	田原 竜也	宮原 崇敏	金指 貴子	山田 恵梨子	坂部 千秋
高校生	稲取高等学校	勝間田 秀寿	鈴木 一繁	飯田 仁美	高村 幸邦	飯田 剛弘
		前田 朝子				
	下田南高等学校	石原 尚子				
	伊東城ヶ崎高等学校				土屋 富浩	前野 智恵子
	下田北高等学校				飯田 ひとみ	小知和 寛子
						飯田 めぐみ
	下田南(定時制)					
	伊東商業高等学校					
	伊東高等学校					

回数		第 1 1 回	第 1 2 回	第 1 3 回	第 1 4 回	第 1 5 回
学校名		平成 7 年度	平成 8 年度	平成 9 年度	平成10年度	平成11年度
小学生	大川小学校 5 年	湯川 貴喜	稲葉 由莉	西尾 雅輝	木村 高德	
	大川小学校 6 年	岡田 真美	稲葉 愛美	稲葉 由莉	星野 健作	山本 茜
	熱川小学校 5 年	中島 亜希子	石森 千春	坂田 佳之	秋永 知南	
	熱川小学校 6 年	横山 隆志	湊 渉子	相沢 祐樹	山岸 みづ紀	山本 紗弓
	稲取小学校 5 年	小野 仁実	米澤 亜弥	佐藤 翠	富岡 加織	
	稲取小学校 6 年	村山 恵美	富岡 志穂美	栗田 里美	内山 浩美	鈴木 友里子
中学生	熱川中学校 1 年	飯田 多賀乃	土屋 美和	山本 力道	久野 麻紀	
	熱川中学校 2 年	稲葉 健太	飯田 多賀乃	横山 宏美	曾我 真奈美	森田 みなみ
	熱川中学校 3 年	嶋田 早紀子	鈴木 美菜	乗松 宏衣	河内 孝樹	佐藤 香里
	稲取中学校 1 年	遠藤 有希子	石垣 ちさと	佐藤 栄美	金指 令枝	内山 浩美
	稲取中学校 2 年	稲葉 いづみ	山口 宏美	上嶋 麻衣子	村木 貴	
	稲取中学校 3 年	桑原 敦子	秋田 真澄	清水 高明	古屋 明日花	村木 貴
高校生	稲 取 高 等 学 校	村木 さやか	須藤 裕美	鈴木 梓	土屋 晋	村上 ゆりこ
	下田南高等学校	金指 純子	内山 加奈子	前田 美佐子	鈴木 千絵	
	伊 東 城 ヱ 崎 高 等 学 校			田中 有希子	五十嵐 広行 高橋 真未	鈴木 愛理
	下田北高等学校	濱野 友加 内山 太恵子	脇田 春啓	野澤 幸恵	湊 浩子	平川 城太朗
	下田南(定時制)	市川 容子	太田 梓			
	伊 東 商 業 高 等 学 校	土屋 健一	高橋 映年	横山 麻子	稲葉 留美	
	伊 東 高 等 学 校				横山 綾子	米沢 知紘

回数		第 1 6 回	第 1 7 回	第 1 8 回	第 1 9 回	第 2 0 回
学校名		平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
小学生	大川小学校 5 年					
	大川小学校 6 年	歌田 裕美	稲葉 啓太郎	木村 美穂	木村 佳奈美	稲葉 拓人
	熱川小学校 5 年					
	熱川小学校 6 年	伊藤 梨紗	中村 賢哉	京極 雄大	岩間 康平	中村 駿介
	稲取小学校 5 年					
	稲取小学校 6 年	芹澤 美沙	遠藤 悠子	内山 颯子	鈴木 里咲	山田 瑞季
中学生	熱川中学校 1 年					
	熱川中学校 2 年	梅原 千種	石川 泰希	稲葉 寛美	山本 彩香	高崎 頼
	熱川中学校 3 年	石森 千春	前田 友美	山本 茜	飯田 龍仁	鈴木 雅晃
	稲取中学校 1 年					
	稲取中学校 2 年	中山 美穂	本田 璃菜	八木 厚子	上嶋 紗也加	齊藤 佳穂
	稲取中学校 3 年	黒田 祐介	内山 浩美	鈴木 宏規	石井 三香子	本田 華菜
高校生	稲 取 高 等 学 校	野口 花菜	小野澤 宏太	菊地 恵	鈴木 俊太	土屋 奈菜
	下田南高等学校		山田 佐世		平井 里奈	村上 麻実
	伊 東 城 ケ 崎 高 等 学 校	佐々木 草平	遠藤 あゆみ	太田 裕介	石塚 里沙	星野 千秋
	下田北高等学校	富岡 志穂美	村木 かおり	鈴木 成禎	飯田 宗一郎	千葉 崇幸
	下田南(定時制)					
	伊 東 商 業 高 等 学 校		森田 有希子	富田 さち	前田 尚也	新居 功
	伊 東 高 等 学 校	太田 美佐	金作 美紀	遠藤 央恵	佐藤 舞	秋永 亮

回数		第 2 1 回	第 2 2 回	第 2 3 回	第 2 4 回	第 2 5 回
学校名		平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
小学生	大川小学校 5 年					
	大川小学校 6 年	木村 慎太郎	稲葉 大樹	石井 圭介	飯田 夕稀	後藤 隼希
	熱川小学校 5 年					
	熱川小学校 6 年	鈴木 亜実	大兼 ことみ	八木 梨紗	渡邊 里奈	中村 萌
	稲取小学校 5 年					
	稲取小学校 6 年	石井 輝	鈴木 結稀	米澤 茜	村木 恭二	盆子原 茜音
中学生	熱川中学校 1 年					
	熱川中学校 2 年	加藤 郁美	黒田 訓英	有賀 伊久磨	大兼 ことみ	八木 梨紗
	熱川中学校 3 年	市川 加菜	富樫 貴史	石井 光晴	小澤 翔太	木村 沙枝美
	稲取中学校 1 年				米澤 茜	大塩 朝加
	稲取中学校 2 年	塙 麻祐子	鳥沢 香純	宮崎 恵里奈		
	稲取中学校 3 年	森下 泰羽	山田 茉莉花	安森 沙耶	安部 尊諠	田村 彩
高校生	稲 取 高 等 学 校	梅原 麻美	岩崎 里音	竹内 遥香	前川 美悠	大鳥 瑞希
	下田南高等学校	高村 和	上島 麻実			
	伊 東 城 ケ 崎 高 等 学 校	宍戸 沙耶香				
	下田北高等学校	山田 晴美	山田 剛史	横山 美紀		
	伊 東 高 等 学 校 城 ケ 崎 分 校		早瀬 明日香	森 正代	篠澤 勇志	土屋あゆみ
	伊 東 商 業 高 等 学 校	太田 侑紀		中山 瑛里	吉田 美沙	
	伊 東 高 等 学 校	横倉 園枝	中村 歩美	釜田 みずき	滝口 汐利	山田 美智子
	下 田 高 等 学 校				相良 龍太郎	石井 利枝

回数		第 2 6 回	第 2 7 回	第 2 8 回	第 2 9 回	第 3 0 回
学校名		平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
小学生	大川小学校 5 年					
	大川小学校 6 年	石井 拓也	稲葉 陶真	飯田 咲喜	石井 那於	飯田 大喜
	熱川小学校 5 年					
	熱川小学校 6 年	加藤 博己	土屋 花音	田村 伊織	嶋田 翔太郎	鳥澤 侑生
	稲取小学校 5 年					
	稲取小学校 6 年	高橋 大地	藤邊 光源	佐久間 祐也	太田 翔夢	梅原 千裕
中学生	熱川中学校 1 年					
	熱川中学校 2 年	萩原 歩美	石井 奈菜子	臼井 裕貴	岩崎 航大	篠原 陽
	熱川中学校 3 年	穴澤 なな子	飯田 夕稀	稲葉 義充	森 萌香	茂木 優紀
	稲取中学校 1 年	鈴木 絢子	村木 亜未香	稲葉 亜汐	鈴木 琢也	齋藤 陸
	稲取中学校 2 年					
	稲取中学校 3 年	宮崎 玲唯奈	太田 和希	山田 さくら	鈴木 綾乃	千葉 優寿花
高校生	稲 取 高 等 学 校	阿部 佳澄	竜田 匠	上柳 希	中嶋 美幸	西田 翔
	伊 東 高 等 学 校 城ヶ崎分校	川合 清香	穴澤 なな子	加藤 美里	佐藤 恭子	小野 あいり
	伊 東 商 業 高 等 学 校	奥村 美咲	木村 遥	木村 円香	加藤 百夏	石井 茉夕子
	伊 東 高 等 学 校			土屋 かおる	日下 拳	
	下 田 高 等 学 校	村木 由仁	横山 蓮	山本 伊万里		相澤 蘭
一般						

回数		第 3 1 回	第 3 2 回	第 3 3 回	第 3 4 回	第 3 5 回
学校名		平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
小学生	大川小学校 5 年					
	大川小学校 6 年	茂木 洋輔	木村 優太	柚田 唯生		
	熱川小学校 5 年					
	熱川小学校 6 年	亀浦 ももか	工藤 真帆	土屋 慶音	稲葉 佳丈	高羽 雄大
	稲取小学校 5 年					
	稲取小学校 6 年	強谷 菜々美	八代 隆世	黒田 ゆき	鈴木 尚	飯田 凜音
中学生	熱川中学校 1 年					
	熱川中学校 2 年	常盤 大聖	長谷川 珠里	山本 晃己	木村 優太	
	熱川中学校 3 年	富田 夏帆	小柳 李菜	内山 結愛	藤井 菜々美	稲葉 理桜
	稲取中学校 1 年	内山 世那	宮下 旦	内山 桃華	鈴木 泰晴	鈴木 友菜
	稲取中学校 2 年					
	稲取中学校 3 年	山田 朝陽	村木 美憂	清水 悠加	前田 晃佑	井口 恋来
高校生	稲 取 高 等 学 校	山本 瑠夏	菊池 和磨	前田 雄太郎	佐藤 南星	山本 大翔
	伊 東 高 等 学 校 城ヶ崎分校	青山 今日子	小川 奈々	佐藤 彩音	太田 あゆみ	
	伊 東 商 業 高 等 学 校	山田 真治郎				
	伊 東 高 等 学 校	稲葉 夕夏		齋藤 那希		
	下 田 高 等 学 校	西田 亜美	川端 綾	米澤 凜夏	高羽 隆生	山田 龍道
一般						本多 まゆみ

回数		第 3 6 回	第 3 7 回			
学校名		令和2年度	令和3年度			
小学生	大川小学校 5 年					
	大川小学校 6 年					
	熱川小学校 5 年					
	熱川小学校 6 年	木村 真緒	野口 はな			
	稲取小学校 5 年					
	稲取小学校 6 年	山田 薫生	鈴木 凜			
中学生	熱川中学校 1 年					
	熱川中学校 2 年					
	熱川中学校 3 年	木村 侑和	生田目 朱莉			
	稲取中学校 1 年					
	稲取中学校 2 年					
	稲取中学校 3 年	石井 六花	田村 悠華			
高校生	稲 取 高 等 学 校	前田 瑠花	米澤 ゆず			
	伊 東 高 等 学 校 城ヶ崎分校					
	伊 東 商 業 高 等 学 校	宮下 耀	竹内 楓			
	伊 東 高 等 学 校					
	下 田 高 等 学 校	田村 豪人	横山 海斗			
一般			高瀬 真由			

編集・発行

第37回 東伊豆町青少年主張発表大会文集

東伊豆町 教育委員会事務局 社会教育係

TEL：0557-95-6206

FAX：0557-95-5691